



特集

本と図書館をめぐるあれこれ

経済学部 松坂 雅子

図書館のおすすめスポット

①キャレル閲覧席

図書館マニア度 ★☆☆

まずは基本的な所から……図書館の閲覧席には仕切りがない広い机もあります。これだと、ふと顔を上げたときに見える人たちが気になったり、ちょっと仮眠を取りたいと思ったときに(!)周りの目が少し気になったり……。そんな人には写真のような仕切りのある閲覧席がもってこいです。このタイプの閲覧席、キャレルと呼ばれるそうです。キャレルの語源が気になった方は、愛知大学図書館データベース「Japan Knowledge」などで検索してみてください。



②新聞閲覧台

図書館マニア度 ★☆☆

名前そのままなのですが、新聞を読むための机です。ひょっとすると、デジタル化が進んでいる昨今、新聞そのものを手に取ったことがない学生さんもいるかもしれませんが、持ち上げて読もうとすると上の方が折れ曲がってしまうし、普段の机で読もうとしても新聞を広げるほどのスペースはなかなか不便です。そこで活躍するのが新聞閲覧台です。この机、新聞を読むためだけに存在しているなんて、すごく贅沢ではないですか……?



③集密書架(移動棚)

図書館マニア度 ★★★

図書館には書棚がたくさん並んでいますが、中にはボタン一つで動く移動式の書棚が設置されている場合があります。私が集密書架に出会ったのは大学院生になってからだったかと思います。初めて操作したとき、書棚が、重い本がたくさん入ったいくつもの書棚を同時に押しのけながら一気に移動する様に、静かに驚いたものです。

これまでの経験では、集密書架は、人の出入りが多いフロアには見当たらず、あまり利用者がいないひっそりした地下階とか、中央図書館ではなく各研究科の図書館とか、図書館利用者の中でもだいぶ上級者が利用するところに設置されていることばかりでした。集密書架を利用するときは、不審者が潜んでいた時のための防犯ベルが入口で貸し出されることもあるくらい、そもそもやや緊張感を持って足を踏み入れる場所でした。

ですがなんと、愛知大学の名古屋図書館では、奥深くに入っていくととも出会ってしまったのです。なので、あっさりと集密書架に出くわしたときはなんだか少々拍子抜けし、ありがたみが薄れてしまったのも事実……。逆に言えば、名古屋図書館では誰も触れるところにこの集密書架があり、マニア度の高い設備を、図書館初心者の方も気軽に触れます。とはいえ、集密書架に用もないのに操作するのは邪道であって、たまたま探している本が集密



書架にあったので必要に駆られて動かした、というのが正しい流儀ですの、その時までは見つけても横目に眺めるだけにしておきましょう。集密書架には利用頻度の少ない図書が配架されるものなので、学年が上がり、卒業論文を書くような年頃になったらその時が来るのではないのでしょうか。

ちなみに、名古屋図書館の集密書架はボタンで操作する電動式ですが、手回し式のものもあり、こちらも味わい深いです。ぜひ色々な図書館に行ってみて、様々な書架を探してみてください。

本とわたし



研究以外で趣味の本を読むのは、電車などの移動中が主で、鞆には大体いつも本が入っています。海外出張の際にも、文庫本を何冊か持って行きます。「行き先の国にまつわる本」とか、「疲れて宿に帰った時に気楽に読みたい本」とか、旅先の気分を想像して、色んなジャンルからバランス良く本を厳選するのは、悩ましくも楽しい作業です。結局運ばれただけになる本も少なくないのですが……、なぜだか充分に本が鞆に入っていないと落ち着かない性分です。

好きな本は、その時々自分の関心や考え方によって変わるものかと思いますが、大学生くらいの時は、山崎ナオコ嬢さんとか増田みず子さんを読んでいて記憶があります。小学生の頃は、人生で一番読書家だった時期なのですが、「赤毛のアン」シリーズ、シャーロック・ホームズ、星新一、ドリトル先生シリーズ、小学生でよく読破したと思うパウル・バックの『大地』など。今は、好きな作家を聞かれれば山本文緒さんです。文緒さんの作品は心理描写の巧みさに、充分唯一無二の素晴らしさがあるのですが、それだけにとどまらず、それぞれの作品にあって驚く仕掛けまでされていて、文緒さんの、できるだけ読者を楽しませたいというエンターテイナー精神(ゆえなの

かは分かりませんが)には感服します。通勤(学)時間が短いとめっきり本を読まなくなるのですが、今は通勤時間が長いので、最近読んで面白かったなあという本が色々あります。松谷みよ子「ちいさいモモちゃん」シリーズ、三浦しをん『舟を編む』、キム・ハナ&ファン・ソンウ『女ふたり、暮らしています。』、西加奈子『サラバ!』などなど。

こうして好きな本が移りゆくなかでも、変わらない自分の好みもあり、「人の人生を長く描く系」、「遺作など晩年に書かれた系」、「ゴリゴリのファンタジーではないけど若干ファンタジー入っている系」、このあたりが継続して好きみたいです。なんでそれが好きなのかと聞かれても説明がつかないような、自分の好みを自覚していくのも面白いです。

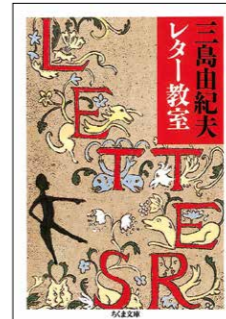
おすすめの本を3冊



①三島由紀夫『三島由紀夫レター教室』ちくま文庫、1991年

『決定版 三島由紀夫全集第11巻』所収 (名図開架・豊図開架 918.68:Mi53:11)

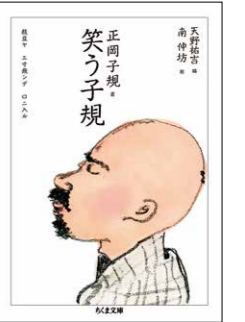
手紙のやりとりで構成された一風変わった小説です。三島由紀夫というと難解なイメージを持つかもしれませんが、さらっと読めますし、それでいて、構成の巧みさたるや……。この本は、数年前に友人から、「間違えて二冊買ってしまったのでよかったら」と贈られたのが出会いでした。本には可愛い紙がブックカバーのようにかけられていて、聞くと、ニューヨークのメトロポリタン美術館だったかMoMA(ニューヨーク近代美術館)だったかのミュージアムショップで見つけた紙なんだとか。おしゃれな友人らしい本の贈り方に心を掴まれたのでした。こんな風に、本と同時にそれにま



つわる友人が思い浮かんでくる、ということも少なくありません。上に挙げた最近面白かった本も、友人に勧められたものがほとんど……。友人へのプレゼントに好きな本を贈ってみたり、はたまた、プレゼントにおすすめの本をリクエストしてみたりしてはいかがでしょうか。

②正岡子規(著)、天野祐吉(編)、南伸坊(絵)『笑う子規』ちくま文庫、2015年(豊図開架 911.368:Ma63)

「冗談好き な子規の珍句集」(出版社による図書紹介より)です。それぞれの句に可笑しみがあがり、添えられているコメントやイラストも相まって、正岡子規という人や俳句がぐっと身近に感じられます。五七五の世界なので、長い文章に苦手意識を持つ人にもおすすめ。



③小野塚知二『経済史——いまを知り、未来を生きるために』有斐閣、2018年(名図開架・電子ブック 332:067)

一応専門分野からも……という付け足しのようなになってしまいましたが、やはりおすすめとして挙げておきたい一冊です。著者が、読み手として、大学生もさることながら社会人(主婦・主夫、高齢者、フリーターも含む)も重視していて、「これから先どうなるのだろうかという漠然とした疑問や不安を覚えることがある」ときに手に取ってほしいと書いているように、日頃の生きづらさとかおかしいなと感じることは一体なぜなのか、考える手がかりになる本です。

